

独立行政法人科学技術振興機構

(平成16年度 年度計画)

平成16年3月31日

独立行政法人科学技術振興機構

目次

(前文)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する 目標を達成するためにとるべき措置・・・・・・・・	1
【全体的事項】・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【個別事項】・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1．新技術の創出に資する研究・・・・・・・・	2
(1) 戦略的な基礎研究の推進・・・・・・・・	2
(2) 社会技術研究の推進・・・・・・・・	5
(3) 対人地雷探知・除去技術の研究開発の推進・・・・・・・・	5
(4) 革新技术開発研究の推進・・・・・・・・	6
(5) 先端計測分析技術・機器の研究開発の推進・・・・・・・・	6
(6) 研究開発戦略の立案・・・・・・・・	6
2．新技術の企業化開発・・・・・・・・	7
(1) 委託による企業化開発の推進・・・・・・・・	7
(2) 研究成果の移転に向けた効率的な技術開発等の推進・・・・・・・・	7
(3) 大学発ベンチャー創出の推進・・・・・・・・	8
(4) 技術移転の支援の推進・・・・・・・・	9
(5) 研究成果活用プラザを拠点とした事業の展開・・・・・・・・	9
3．科学技術情報の流通促進・・・・・・・・	10
(1) 科学技術の研究開発等に関する情報の流通促進・・・・・・・・	10
(2) 科学技術に関する文献情報の提供・・・・・・・・	14
4．科学技術に関する研究開発に係る交流・支援・・・・・・・・	14
(1) 地域における産学官等が結集した共同研究事業等の推進・・・・・・・・	14
(2) 地域における研究開発促進のための拠点への支援の推進・・・・・・・・	15
(3) 戦略的な国際科学技術協力の推進・・・・・・・・	16
(4) 国際シンポジウムの開催、外国人研究者宿舎の運営等・・・・・・・・	17
(5) 異分野交流の推進・・・・・・・・	17
(6) 研究協力員の派遣を通じた研究支援・・・・・・・・	17

5 . 科学技術に関する知識の普及、国民の関心・理解の増進	1 7
(1) 科学技術に関する学習の支援	1 7
(2) 地域における科学技術理解増進活動の推進	1 9
(3) 全国各地への科学技術情報の発信	1 9
(4) 日本科学未来館の整備・運営	2 0
6 . その他行政等のために必要な業務	2 1
(1) 関係行政機関の委託等による事業の推進	2 1
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	2 2
1 . 組織の編成及び運営	2 2
2 . 業務運営の効率化	2 2
予算（人件費の見積りを含む。） 収支計画及び資金計画	2 4
短期借入金の限度額	2 4
重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画	2 4
剰余金の使途	2 4
その他主務省令で定める業務運営に関する事項	2 4
1 . 施設及び設備に関する計画	2 4
2 . 人事に関する計画	2 4
(1) 方針	2 4
(2) 人員に係る指標	2 5
3 . 中期目標期間を超える債務負担	2 5

(前文)

独立行政法人通則法第31条第1項に基づき、独立行政法人科学技術振興機構の平成16年度の業務運営に関する計画を以下の通り定める。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

【全体的事項】

- (1) 内外の研究動向等の調査・分析機能を強化するとともに、文部科学省等国の政策立案部門と連携を図り、新規施策の提案、新規事業の形成など機構の業務戦略の企画立案を行う。また、併せて国の科学技術振興に係る政策立案に寄与する。
- (2) 機構の各事業において実施される研究課題等について、外部専門家・有識者により、事業目的に応じた明確な基準に基づいて厳格に事前評価、中間評価、事後評価を、また必要な場合は追跡調査を実施する。また、機構の平成15年度の事業実績の自己評価を行うとともに評価結果を事業運営に反映させる。
評価の方法、基準及び結果はインターネット等により積極的に公開し、機構の事業について国民への説明を積極的に行う。また、外部有識者、機構の事業に参画している者、機構が提供するサービスのユーザー等の機構の事業運営に対する意見の把握に努める。
- (3) 事業による成果については新聞発表等の広報活動やホームページへの掲載、データベース化、シンポジウムによる公表などを積極的に行う。さらに、機構の認知度の向上のため、中小企業等に対する事業の周知活動の具体的な方法について検討を行い、周知活動を強化する。
- (4) 各事業の実施に当たっては、事業に参画する外部機関や個人のインセンティブに配慮し、外部機関や個人の能力が十分発揮できるよう措置するとともに、我が国全体として最大限の成果が上がることを目的として、関連する事業を実施している機関との適切な連携・協力関係を構築する。

【個別事項】

1. 新技術の創出に資する研究

(1) 戦略的な基礎研究の推進

国が定めた戦略目標の達成に向けた基礎研究の推進

イ. 研究領域、研究総括の選定

- ・ 機構による調査・分析をもとに研究領域、研究総括を外部専門家の評価を踏まえ選定し、その評価結果を公表する。

ロ. 研究領域の迅速な立ち上げ（バーチャルラボの構築）

- ・ 公募型の研究領域及び研究総括を戦略目標の通知を受けてから1ヶ月程度以内に選定する。
- ・ 公募型の平成16年度発足研究領域及び既存の研究領域において、平成16年度に採択した研究課題について、採択決定後の10月以降速やかに研究に着手するため、研究計画の策定、研究代表者説明会の開催、研究契約の締結、研究者等の雇用手続等を進める。
- ・ 総括実施型の平成16年度発足研究領域については、10月以降速やかに研究に着手するため、研究計画の策定、研究実施場所の設営、研究者等の雇用手続等を進める。
- ・ 研究課題の事前評価は、研究総括が領域アドバイザーの協力を得て行う。
- ・ 公募による研究提案の受付に電子システムを導入することに関する調査を行うとともに、必要に応じて外部の専門的能力を活用し、平成17年度の導入を目指したシステムの構築を行う。

ハ. 研究領域の効果的運営（バーチャルラボの効果的運営）

- ・ 公募型47領域及び平成16年度に発足する領域について、並びに総括実施型12領域及び平成16年度に発足する領域について、研究を推進する。
- ・ 領域会議・サイトビジット等を通じて研究総括が研究代表者等とコミュニケーションを図り、研究に関して、進捗状況等の把握、助言等を行う。
- ・ 研究総括のマネジメントを確保しつつ、チーム型研究については、平成16年度新規発足領域より、研究機関の事情を踏まえて、委託研究費の費目や委託比率を決定し、間接経費の拡充を図る。
- ・ 研究の推進に当たっては、委託により研究を実施する際は、委託研究費の30%に相当する額を間接経費として支出する。また、必要に応じて使用する研究施設の借料・光熱水料等、研究環境に係わる経費を研究機関に支出する。

- ・総括実施型の研究領域のうち、外国の研究機関と共同して研究を実施するものについては、当該研究機関と必要な取り決めを交わした上で連携して研究を推進する。

二．研究の評価及びフォローアップ

- ・各研究領域の研究総括及び領域アドバイザー、さらに必要に応じて外部専門家を加え、チーム型研究においては、平成13年度採択の45課題について中間評価を行い、平成16年度終了の43課題について事後評価を実施する。また、平成16年度終了の個人型研究142課題について、事後評価を実施する。
- ・中間評価の結果は研究チーム編成の見直しや資源配分へ反映し、事後評価の結果については事業運営の改善に反映させる。
- ・平成17年度に研究が終了する研究課題の研究代表者等より研究提案を募り、外部専門家による評価を踏まえ、研究期間終了後に継続研究へ移行する研究課題を研究期間終了6ヶ月以上前に決定する。
- ・公募型の平成12年度発足の2領域について中間評価を行うとともに、平成16年度終了の5領域について事後評価を実施し、評価の結果は資源配分や事業運営の改善に反映させる。
- ・研究課題及び研究領域の中間、事後評価、並びに追跡調査については、結果がまとまり次第、ホームページ等により公表する。
- ・研究課題が終了した研究者に対してアンケート調査を実施し、その結果を制度の改善に反映させる。

卓越した人物を総括責任者とする独創性に富んだ基礎研究の推進

- ・継続12プロジェクトについて研究を推進し、平成12年度発足4プロジェクト、及び平成13年度発足4プロジェクトについて中間評価を行うとともに、平成16年度終了する4プロジェクトについて事後評価を実施する。
- ・評価は外部専門家により行い、中間評価の結果は研究チーム編成の見直しや資源配分へ反映し、事後評価の結果については事業運営の改善に反映させる。
- ・平成11年度終了4プロジェクトについて、追跡調査を実施する。
- ・中間・事後評価及び追跡調査については、結果がまとまり次第、ホームページ等により公表する。

基礎的分野における世界の英知を集めた国際共同研究の推進

- ・継続4プロジェクトについて研究を推進し、平成13年度発足1プロジェクトについて中間評価を行うとともに、平成16年度終了する2プロジェクトのうち、1プロジェクトについて、事後評価を実施し、別の

- 1プロジェクトについては事後評価を開始する。
- ・評価は外部専門家により行い、中間評価の結果は研究チーム編成の見直しや資源配分へ反映し、事後評価の結果については事業運営の改善に反映させる。
- ・平成11年度に終了した1プロジェクトについて、追跡調査を実施する。
- ・中間・事後評価及び追跡調査については、結果がまとめ次第、ホームページ等により公表する。

特定分野におけるシミュレーション等計算科学技術を活用した研究開発の推進

- ・平成13年度に採択した21課題について、11月末まで研究を推進する
- ・終了課題について、外部専門家による事後評価を開始する。

研究成果の公表、普及

- ・研究成果は、レベルの高い国際誌（国内学会が発行している英文誌を含む）を中心に研究論文として積極的に投稿し、公表するとともに、研究者による研究成果の公表を機構として支援する。
- ・成果の公表・普及のために報告会、シンポジウム等を開催する。シンポジウム等の開催数は以下とする。

戦略的創造研究推進事業

研究成果報告会 2回

このほか、研究領域毎のシンポジウム等を開催する。

- ・研究成果については、研究成果展開総合データベース（J STORE）に掲載すること等によりデータベース化を進めるとともに、知的財産に配慮しつつホームページ等により公開する。計算科学を活用した研究開発の研究成果のソフトウェアについてはソフトウェアライブラリを利用し、広く公開・流通を図る。
- ・知的財産権の権利化の支援を行う。また、得られる研究成果は原則として研究実施機関の帰属とする。
- ・研究成果については機構が実施する技術移転制度や技術移転機関等による社会還元を促進する。
- ・日本科学未来館等国民が直接研究成果に接する機会を提供する活動に積極的に協力するとともに、研究成果としての特許件数等をホームページ等を通じて公表する。

(2) 社会技術研究の推進

- ・社会技術研究推進のため「社会技術研究フォーラム」、「ミッション・プログラム」、「公募型プログラム」を実施する。
- ・「社会技術研究フォーラム」については、社会問題の本質を認識し、その解決を図る研究のあり方について継続的に議論する。
- ・「ミッション・プログラム」については、社会問題の解決を図るために重要と考えられて設定した既存のミッションに基づき、その目標達成に向け研究を推進する。

また新規ミッション（心身や言葉の健やかな発達と脳の成長）を設定し、研究を開始する。

- ・「公募型プログラム」については、既存の3領域について、平成13、14、15年度採択課題の研究を推進する。
また、平成16年度採択課題の研究を開始する。
- ・新規ミッション・プログラム及び公募型プログラムの新規研究領域等の調査・検討を実施する。
- ・新規「ミッション・プログラム」（心身や言葉の健やかな発達と脳の成長）の事前評価として、研究統括の選定、全体研究計画策定について審議・評価を行う。

「公募型プログラム」の平成16年度採択課題の事前評価を研究総括が領域アドバイザーの協力を得て行う。平成16年度に終了する平成13年度採択の10課題については、事後評価を実施し、その結果を公表する。

- ・研究成果の公表や意見交換等を目的として、以下の活動を実施する。
 - 公開シンポジウム 2回
 - ワークショップ 12回
 - 学会発表等 20件
- ・「公募型プログラム」の平成16年度に終了する10課題について現実社会の諸問題の解決や社会における新たなシステムの構築に資する研究成果について、終了シンポジウムを開催し公表する。

(3) 対人地雷探知・除去技術の研究開発の推進

- ・人道的観点からの対人地雷の探知・除去活動を支援するセンシング技術、アクセス・制御技術について、短期的研究開発課題は実用化を目指した研究開発、中期的研究開発課題では基盤的な研究開発を推進する。
- ・研究開発全体を統括する研究総括を置き、その下に産学官からなる研究開発チームを組織して研究を推進する。研究総括を技術面で補佐するスタッフを配置するとともに、各研究チームへの支援スタッフの派遣、試験研究用材料

等の購入等により、研究を支援する。

- ・実証試験に供しうる技術の開発を目標に、引き続き研究開発を実施する。

(4) 革新技术開発研究の推進

- ・安全・安心で心豊かな社会の実現等に関連し、革新性の高い独創的な技術に関する平成16年度課題を公募し、外部専門家・有識者による事前評価に基づき選定し、技術開発を開始する。
- ・平成16年度採択課題の技術開発開始に当たっては、事前評価結果を研究計画の見直しや資源配分に反映させる。
- ・評価結果は知的財産等に配慮し公表する。
- ・プログラムオフィサーによる進捗状況等の確認、適切な指導・助言等を行う。
- ・人文社会科学等の知見を活用した安全・安心に係る俯瞰的な調査研究を実施し、その成果を課題の公募方針等に反映する。
- ・平成17年度課題の公募を開始する。

(5) 先端計測分析技術・機器の研究開発の推進

- ・先端計測分析機器及びその周辺システムの研究開発及び独創的な計測分析技術・手法を確立する研究開発に関する課題を公募する。
- ・応募課題については、外部専門家による事前評価を行い、選定する。
- ・採択する課題については速やかに研究開発に着手するため研究開発実施計画の策定、事業実施説明会、研究契約の締結等を進める。
- ・事業運営に当たっては、外部専門家の協力を得て、研究開発全体の総括、技術動向の把握、優れた技術の発掘等を実施できる体制を整える。
- ・機構内の関連各部署と連携を密にし、整合性のある効果的な研究開発を推進する。
- ・各研究開発課題においては研究開発期間中における知的財産権の取得を奨励する。
- ・研究開発成果については必要に応じて論文等の発表を行うことによって積極的な社会還元を推奨する。

(6) 研究開発戦略の立案

- ・戦略立案の体制を確立するため、引き続きフェローの任期付き雇用を進め、体制の補強を行う。また、外部有識者によるアドバイザー機能を実現する。
- ・様々なデータベースの活用や研究者へのインタビュー等により、内外の研究開発動向及び社会的・経済的ニーズを調査・分析し、今後必要となる研究開発領域や課題等を体系的に抽出する。

- ・北米、欧州、中国を中心としたアジアの研究開発動向や科学技術政策動向の把握をおこなう人材を配置し、海外の科学技術活動の調査を実施する。
- ・今後の研究開発戦略の形成を目的として、「科学技術未来戦略ワークショップ」等の開催により、広範な関係者の参加を得て、オピニオンの形成と集約を行う。
- ・上記をもとに、機構の基礎研究事業において重点的に推進すべき研究領域等の企画・立案を行う。
- ・上記の活動を通じて得られた成果が機構の事業全般において広く活用されるよう、関連部署に得られた成果を提供する。
- ・機構の基礎研究事業において設定された研究領域等の評価の準備を進める。

2. 新技術の企業化開発

(1) 委託による企業化開発の推進

- ・大学、公的研究機関等の研究者を訪問する等、常時課題の収集に努めるとともに、大学、公的研究機関等に対して課題を広く募集し、外部専門家・有識者による事前評価を行い、開発リスクが大きく、経済的、社会的に大きな波及効果が期待できる課題を選定して開発課題とし、技術開発力、経営基盤等を有する企業等に開発を委託する。
- ・開発期間が5年を越える課題については中間評価を行う。開発終了した課題は事後評価により、開発結果の評価を行う。評価結果については知的財産等に配慮しつつ公表する。さらに、成果の実施状況等につき追跡調査を実施する。
- ・開発が成功した課題は、開発実施企業に対し支出した開発費の返済を求める。
- ・実施料、優先実施期間、開発費の返済条件等については研究者や開発企業のインセンティブを配慮した実施方針を事業運営に反映するとともに、開発期間や開発費等を柔軟且つ弾力的に運用する。
- ・開発終了課題について、開発成果の実施・普及に向け、企業に対し成果を実施するように促すほか、技術説明会等により広く開発成果を紹介する。

(2) 研究成果の移転に向けた効率的な技術開発等の推進

研究成果の実用化に向けた技術開発

イ. 研究成果の実用化プランの作成、育成手段の助言

- ・技術移転プランナーを配置し、育成候補課題を対象に実用化プランを作成し、最適な育成手段を研究者に助言する。また、実用化が有望であるがデータが不足している研究成果については、研究者又は企業の協力

を得て追加の調査研究（データ補完、技術加工）を行う。

- ・技術移転プランナーによる技術評価に関するノウハウの蓄積を図る。

ロ．成果育成プログラムの実施

- ・成果育成プログラム A（権利化試験）

平成 17 年度採択課題について、課題提案を公募する。

平成 16 年度課題を選定し、試験を実施する。

平成 15 年度採択課題について引き続き試験を実施する。

平成 14 年度採択課題について平成 16 年 9 月まで引き続き試験を実施し、成果報告を取りまとめたうえで事後評価を実施する。

平成 13 年度採択課題の事後評価、追跡調査の結果を取りまとめる。

- ・成果育成プログラム B（独創モデル化）

平成 17 年度採択課題について、課題提案を公募する。

平成 16 年度課題を選定し、モデル化を実施し、成果報告を取りまとめる。

平成 15 年度終了課題について事後評価及び追跡調査を実施する。

平成 12 年度終了課題について追跡調査を実施する。

研究成果のあっせん・実施許諾

イ．研究成果の収集・公開業務の推進

- ・研究成果を収集し、研究成果展開総合データベース（J - STORE）に掲載するとともに、専門家により企業への紹介を行う。

- ・新技術説明会及び技術移転支援フェア（大学見本市と連携）等を開催し、企業が関心を示したものは、あっせん・実施許諾等の段階に移行させる。

ロ．開発あっせん・実施許諾業務の推進

- ・技術移転に関して経験を有する専門家等を活用して企業等への紹介、企業化開発のあっせん・実施許諾を行う。また、実用化促進委員、技術移転プランナー等の連携促進により仲介者ネットワークの拡充に努める。

- ・平成 16 年度通期の開発あっせん・実施許諾の件数として、特許ベース 120 件以上、企業ベース 60 件以上を目指す。

(3) 大学発ベンチャー創出の推進

- ・プレベンチャー継続分

平成 14 , 15 年度採択課題について研究開発を継続する。平成 15 年度採択課題の中間報告会を開催する。

平成 13 年度採択課題について研究成果報告会、事後評価を実施する。

平成12年度採択課題（終了）について追跡調査を実施する。

・大学発ベンチャーの創出推進

平成16年度採択課題を選定し、研究開発を開始する。

平成15年度採択課題について研究開発を継続する。

（4）技術移転の支援の推進

研究成果特許化支援業務の推進

- ・大学、公的研究機関、技術移転機関、企業、一般等からの技術移転に関する相談に対し、フリーダイヤル、専用メール及び個別面談等により対応する。平成16年度は300件以上の相談件数に対応する。
- ・国立大学の法人化等に伴う新たな特許出願の増大に対応し、特に国際特許出願に重点を置いて、的確な目利きと迅速な処理を実施し、特許化支援を推進する。このために、大学知的財産本部との連携、各地の特許化支援事務所の活用を念頭に、支援体制の見直しを図る。
- ・大学等の研究開発成果とニーズのマッチング機会を充実させるため、全国レベルの大学見本市を開催する。

技術移転のための人材育成業務の推進

- ・技術移転のための目利き人材育成プログラム研修を実施する。また、大学知的財産本部等との連携を図り、地域においても研修を実施する（基礎研修12回、実務応用研修8回、地域基礎研修2回）。
- ・平成16年度は、延べ380人以上の参加者に対して実施する。
- ・研修の実施に当たっては、若手人材の育成、研修参加者のインセンティブ向上の観点にも配慮する。

（5）研究成果活用プラザを拠点とした事業の展開

- ・各地域の自治体や関係機関との連携を図り、地域の現状を考慮し策定した運営方針の下に各プラザの運営を行う。
- ・科学技術コーディネータを各プラザに配置する。（各プラザ4人程度）
- ・科学技術コーディネータは、技術動向調査等を通して、地域の大学、企業等における研究ニーズ、シーズを探索するとともに、シーズの応用可能性を探る実用化検討につなげるほか、研究開発促進拠点支援事業の成果等を活用して、大学等の独創的な研究者を中心とした研究会、セミナーをプラザにおいて開催する。
- ・プラザに、科学技術コーディネータの業務補助を通じ、次世代のコーディネータを育成することを目的にコーディネートスタッフを配置する。
- ・また、他の制度におけるコーディネート活動従事者との連携を図るため、各

種制度コーディネータの連携方策等について検討する連絡会を発足させるとともに、発足した連絡会において検討を開始する。

- ・各プラザに、機構各事業のパンフレット、パネル等の展示を行うとともに、科学技術コーディネータの活動を通じ、事業紹介を図る。
- ・各プラザにおいて大学、企業及び機構が共同して育成研究を実施する。
- ・平成16年度に終了する共同育成研究課題について、事後評価を実施するとともに、企業化開発又は企業化へつなげるための働きかけに着手する。
- ・機構の他の制度と連携するなど、プラザ内の研究室について有効活用する。

3. 科学技術情報の流通促進

(1) 科学技術の研究開発等に関する情報の流通促進

研究開発活動等のデータベース化

- ・研究情報基盤を着実に整備するため、以下のデータベースの整備等を行い、インターネット等を活用して、提供する。
- ・提供するデータベースについては、当該データベースの利用者の需要動向等を定期的に調査し、データベース化する情報や提供方法の改善、積極的かつ効果的な広報活動、利用者の利便性向上等の取組みを進める。
- ・関連性の高いデータベースについては、当該データベースの利用数の向上のため、研究者情報を中心とした統合的な検索が可能となるようなシステムの検討を行う。

イ. 研究開発支援総合ディレクトリデータベース

- ・研究者等の研究開発活動の支援のため、国内の大学、公的研究機関等の約2,300機関を対象とした調査を実施し、研究機関情報、約20万人の研究者情報、49,000件の研究課題情報、3,200件の研究資源情報を収集し、データベースを整備し、提供等する。
- ・アンケート調査の際に全研究者へWeb入力用IDを発行する等、Web入力機能の利用を促進する。
- ・電子的なデータ交換の促進等、各機関の保有する研究者データ等の情報源を活用して、データベースの内容を拡充する。
- ・技術移転関係のフェア等に出展し、データベースの活用・普及を図る。
- ・以上を通じて研究開発支援総合ディレクトリデータベースのアクセス数について着実に増加させる。

ロ. 研究成果展開総合データベース

- ・研究開発成果の迅速な展開のため、特許等の研究成果情報を収集・加工して、データベースを整備し、提供等を行う。

- ・他機関の研究成果データの研究成果展開総合データベースへの収録について、関係機関との協議を進める。また、外国出願特許データの収録のためのシステム開発等を行い、掲載を開始する。
- ・技術移転関係のフェア等に出展し、データベースの活用・普及を図る。
- ・未公開特許情報のうち、公開されたものを速やかに公開特許情報へ移行するために必要な公開公報データ取得機能を本格的に運用する。
- ・以上を通じて研究成果展開総合データベースのアクセス数について着実に増加させる。

ハ．研究者人材データベース

- ・研究者等の多様なキャリアパスの開拓や能力、技術を有効活用するため、教育職、研究職、技術職に関する求人公募情報及び求職研究者情報等を収集して、それらに関するデータベースを整備し、提供等を行う。
- ・国内の大学、公的研究機関を主な対象にパンフレット・ポスターを配布するとともに、インターネット上に掲載している求人公募情報を調査し、公募情報の掲載元に本データベースの周知を行う。
- ・データベースの広報活動等を通じて、求人会員・求職会員を増加させる。
- ・求人公募情報や求職研究者情報の研究分野別集計等の利用者分析を行い、広報宣伝効果の期待できる学会誌等メディアへの広告掲載を行い、アクセス数を着実に増加させる。

研究情報のデータベース化

- ・公的研究機関が研究成果として所有する試験・研究データについて、公的研究機関と共同でデータベース化を行い、データベース化終了後、データベースの公開・運用を公的研究機関と共同で行う。
- ・データベース公開後、外部専門家・有識者からなる委員会により事後評価を行う。評価結果については、当初のデータベース化計画の達成度等を明らかにして公表する。

技術者の継続的能力開発のためのコンテンツ開発・提供及び失敗知識データベースの整備

イ．技術者の継続的能力開発のためのコンテンツ開発・提供

- ・外部専門家・有識者からなる委員会での調査・審議を踏まえて、57テーマの能力開発コンテンツを開発・整備するとともに、平成15年度までに開発・整備したコンテンツをインターネット等を通じて提供する。
- ・普及のため学会でのデモンストレーション等を行う。
- ・以上を通じて能力開発コンテンツの年間利用件数を増加させる。

ロ．失敗知識データベースの整備

- ・外部専門家・有識者からなる委員会による調査・審議に基づき、失敗事例データの収集及び分析を行うとともに、合計で840件以上を収録したデータベースの整備を行う。
- ・試験公開を通じて得た知見等により、失敗知識データベースの改良を行い、一般公開する。

バイオインフォマティクスの研究情報基盤整備の推進

- ・生命情報データベースの高度化、標準化、高機能生体データベースの運用・機能拡張、研究開発の推進を統括、副統括の指導のもと実施する。
- ・平成16年度上期に終了する研究開発課題について、統括が外部専門家・有識者からなる委員会の協力を得て事後評価を行う。
- ・4生命情報データベースについて、公開へ向けて高度化、標準化の研究開発を継続して実施する。
- ・普及研修会を開催し、データベースの活用・普及を図る。
- ・地球規模生物多様性情報機構（GBIF）の活動を推進するために設置されたGBIF技術専門委員会の事務局としての活動を行う。

国内外の科学技術情報に関する提供システム等の整備、運用

イ．科学技術関係資料の収集及びインターネット等による提供

- ・科学技術関係資料を、国内資料を12,000タイトル規模、国外資料を4,600タイトル規模で収集する。
- ・収集した資料に掲載された論文等ごとに論文名、著者名、発行日等の書誌情報について90万件規模のデータベースを整備する。

ロ．科学技術情報発信・流通総合システムの整備・運用

- ・我が国の学協会の電子ジャーナル出版を支援するため、論文の審査、編集、流通等を統合的に行うシステムを整備し、運用する。
- ・参加学協会等のユーザーの要望項目を反映したシステムの機能拡張を行う。
- ・JSTリンクセンターを活用し、他の電子ジャーナルやデータベースとの引用文献リンクを行う。また、リンク可能な引用文献数の拡大のため、国内外の諸機関に対してJSTリンクセンターへの参加の働きかけを行うとともに、リンク情報の整備、拡充を行う。
- ・学協会訪問等を行い、科学技術情報発信・流通総合システムの参加学会誌数を352学会誌以上とする。
- ・以上を通じて科学技術情報発信・流通総合システムのアクセス数を増加させる。

ハ．科学技術に関する文献情報の英文による提供

- ・機械翻訳の活用により我が国の科学技術に関する文献情報を15万件英文化し、毎年度15万件(過去3年以内を収録)をインターネット経由で世界に向けて発信する。
 - ・広報活動を行い、英文化された科学技術に関する文献情報へのアクセス数を増加させる。
- 二．研究開発成果の産業化の促進のための文献・特許の統合検索システムの整備・運用
- ・特許調査における利便性向上の観点から、特許データベースと文献データベースを共通の方法で検索するため、文献データベースに特許分類を効率的に付与する方法の検討を平成15年度に引き続き行う。
 - ・特許と文献の総合検索システムの民間事業者とのインターフェースを開発し、連携を可能にする。

科学技術情報に関する国際協力、標準化

イ．科学技術情報活動における国際協力の推進

- ・国内の研究情報に関する英文ディレクトリの作成を行いインターネット経由で世界に向けて情報を発信する。
- ・JST技術移転支援フェア等における英文ディレクトリの紹介等の普及活動を行うことにより、英文ディレクトリへの年間アクセス数を増加させる。
- ・日独情報ドキュメンテーションパネル等に積極的に参加し、国際的な協力活動を行う。
- ・アジア・太平洋地域諸国と科学技術情報活動についての情報交換のためのワークショップを開催する。また、参加諸国から我が国に研修生を受け入れ、研修を実施する。

ロ．科学技術情報の流通を円滑化するための基準の制定

- ・科学技術情報の流通を円滑に促進するため、科学技術情報流通技術基準(SIST)の普及を目的とし、SISTの制定・見直しを行うための各種委員会等の開催及び説明会の開催、インターネット等を活用した情報提供等を行う。

ITBL材料アプリケーションの開発

- ・ITBL(IT-Based Laboratory)プロジェクトにおけるアプリケーションの一つとして、分散した物質・材料データベースを統合的に検索するシステムの開発を継続する。また、インターネットを通じたシステムの試験公開については、平成15年度に開発した機能を追加して公開する。

(2) 科学技術に関する文献情報の提供

- ・国内外の科学技術関係資料の抄録等を作成してデータベースを整備し、オンライン等による科学技術情報の提供等を行う（JOIS）。また、国際科学技術情報ネットワーク（STN）事業をケミカルアブストラクツサービス（CAS）、フィツカールスルーエ（FIZ-K）と共同で運営し、国内の科学技術に関する文献情報を海外へ提供するとともに国内利用者へ海外の科学技術に関する文献情報を提供する。
- ・科学技術情報の流通を促進するため、科学技術文献速報等の出版物を発行するほか、複写サービス、受託検索サービス等を行う。
- ・国内外の科学技術関係資料に関する書誌情報に対して、日本語抄録等を付与した90万件規模の文献情報データベースを作成する。
- ・文献情報データベースの作成については収益性を確保しつつ網羅性の維持に努め、研究情報基盤の整備を目的として実施する。
- ・大学等教育研究機関・国公立試験研究機関等（独法を含む）に対する利用拡大を図り、科学技術の振興に寄与するため、安価な価格設定で情報を提供する。また企業の知的財産部、中小企業、公共図書館等利用者の利用拡大を図る。
- ・文献情報データベースの利用者に対するアンケート調査及びヒアリング調査や「お客様の集い」等を実施し、利用者の意向を把握してサービス等の向上に反映させる。
- ・速報性優先誌、並びに各作業工程の処理期間短縮を目標として設定したガイドラインに基づき、情報の収集から抄録等提供までの期間を平均42日以下とする。
- ・作成した文献情報データベースについてインターネット等を活用して利便性を向上させることにより、文献情報データベースの利用件数2,830万件以上の利用、累積アカウント数11,000件以上とし、幅広く研究者、技術者の研究活動における情報取得をサポートする。
- ・文献情報データベースの普及のため、利用者研修会を開催する。
- ・文献情報データベースと各種電子ジャーナルのリンクを充実させることにより利用者の利便性を向上させ、文献情報データベースから原文献への年間アクセス数16,000件以上とする。

4. 科学技術に関する研究開発に係る交流・支援

(1) 地域における産学官等が結集した共同研究事業等の推進

- ・平成16年度新規開始地域を原則2地域採択する。実施地域の選定に当たっ

- て、外部有識者を含む委員会において評価を行い、評価結果を公表する。
- ・事業の推進、調整に当たり、機構は都道府県等が指定する地域の科学技術振興を担う財団等（中核機関）と協力し、運営体制を整備する。
- ・中核機関に事業マネジメントの最高責任者である事業総括、技術的判断の最高責任者である研究統括を配置する。
- ・研究の実施に当たり、公設試験研究機関内やレンタルラボ等に当該共同研究の中核を形成するコア研究室を設置し、研究員を配置する。
- ・新技術・新産業の創出に資するため、研究者の成果を実用化させるための新技術エージェントや弁理士、税理士、会計士等の事業化に必要な専門的知識・経験を有する人材をアドバイザーとして一時的な利用を可能とするスキルバンクを中核機関に配置する。
- ・平成14年度事業開始地域に対する、事業の継続を含め方向性を検討するための中間評価を、平成11年度事業開始地域（平成16年度事業終了地域）に対する、事業成果に関する事後評価を、外部有識者を含む委員会で行い、評価結果を公表する。
- ・以下に示す目標の達成に向け、都道府県等及び中核機関との緊密な連携のもと、支援を行う。

地域が掲げる事業目標及び研究開発目標

研究開発の成果を産業界へ波及させるための技術移転に向けた戦略的活動体制の確立

事業推進に当たっての都道府県等の支援体制の確立

新技術・新産業の創出に資する地域C O Eの形成に向けた整備方針の確立

（業終了地域において、参画機関数 10機関/地域、発表論文数 20件/年・地域、出願特許数7件/年・地域、を標準的な水準とする。）

- ・機構の基礎研究事業等で実施されている追跡調査の事例を参考として、本事業における追跡調査の手法や内容を決定する。
- ・成果を有効活用するために、文部科学省及びその他関係行政機関等と有機的連携を行う。
- ・新技術エージェント会議や中核機関事業総括スタッフ会議等の開催により、失敗事例、成功事例を分析し、ノウハウを共有化する。また、機構が実施している技術移転のための目利き人材育成プログラム研修を積極的に活用して、新技術エージェントや事業総括スタッフのスキルアップに努める。

（2）地域における研究開発促進のための拠点への支援の推進

- ・公募により選定した各地域において、技術移転、特許等に専門的な知見を有

し、大学等のシーズの発掘と企業等のニーズを融合させることができる人材をコーディネータとして配置する。なお、新たな地域の募集は実施しない。

- ・各コーディネータは、大学等の研究成果のシーズ調査、企業のニーズ調査、育成試験の実施、技術移転関連の諸事業への橋渡し等の産学官交流・技術移転に係わる諸活動を行い、地域の連携拠点機関と協力して、研究成果を育成・活用する。
- ・地域におけるコーディネート機能の構築等科学技術基盤形成の強化に資するため、平成11年度事業開始地域に対して、事業成果に関し事後評価を、外部有識者を含む委員会で行い、評価結果を公表する。
- ・以下に示す目標の達成に向け、都道府県等及び中核機関との緊密な連携のもと、支援を行う。
 - 大学等の研究成果及び企業ニーズの適切な調査・収集・整理
 - 将来の実用化に有用な研究成果の抽出と、実用化に向けた育成試験の実施
 - 研究成果を実用化につなげるための体制整備
 - 連携拠点機関を中心とした地域のコーディネート機能の強化
(事業終了地域において、シーズ・ニーズ調査数 100件/年・地域、育成試験実施数 10件/年・地域、出願特許件数 7件/年・地域、橋渡し・実用化・商品化件数 5件/年・地域を標準的な水準とする。)
- ・機構の基礎研究事業等で実施されている追跡調査の事例を参考として、本事業における追跡調査の手法や内容を検討する。
- ・成果を有効活用するために、文部科学省及びその他関係行政機関等と有機的連携を行う。
- ・コーディネータ会議を開催し、失敗事例、成功事例を分析し、ノウハウを共有化する。機構が実施している技術移転のための目利き人材育成プログラム研修を積極的に活用して、科学技術コーディネータのスキルアップに努める。また、コーディネータ・ジャーナルの発行やコーディネータ・データベースの整備を行うことにより、各種コーディネータの知見、経験を紹介して、ノウハウの共有化を図る。

(3) 戦略的な国際科学技術協力の推進

- ・文部科学省より示される平成16年度に実施する課題での協力に関し、カウンターパートの外国機関と協力方法について予め協議し、合意する。
- ・当該課題に関し、カウンターパートの外国機関との合意内容に基づき、両機関が連携して研究集会の開催等を行う。
- ・平成15年度設定課題に関して、カウンターパートの外国機関と連携して、

比較的小型の共同研究等を推進するとともに、個別の研究領域を対象とした研究集会を開催する。

(4) 国際シンポジウムの開催、外国人研究者宿舍の運営等

- ・国際シンポジウム、日米先端工学シンポジウム、アジア太平洋マネジメントセミナーを開催する。
- ・上記のシンポジウム、セミナーで得られた情報については、他の事業でも活用できるよう提供する。
- ・海外事務所等を拠点とし、海外との連絡調整、情報収集活動を行う。
- ・外国人研究者宿舍に関して80%以上の入居率を達成するべく、外国の研究者を受け入れる独法や大学に勧誘活動を行う。

(5) 異分野交流の推進

- ・自然科学のみならず、人文・社会科学も含む異なる研究分野、組織の研究者の交流の場を提供するため、有識者を含む委員会において選定する4テーマについて、コーディネータを中心にフォーラムを開催する。フォーラム参加人数は50人/回程度とする。
- ・平成15年度に開催したフォーラムの議論の中から、さらに討論を深めることにより新たな研究領域の創出が期待される内容に絞り、ワークショップを開催する。ワークショップ参加人数は20人/回程度とする。
- ・平成15年度に実施したワークショップのテーマから、より検討対象を絞った調査研究を行うため、有識者を含む委員会で選定する1テーマについて領域探索プログラムを実施する。
- ・各プログラムの結果については、報告書を取りまとめ、翌年度公表する。

(6) 研究協力員の派遣を通じた研究支援

- ・平成14年度までに採択した74課題について引き続き研究協力員を派遣する。
- ・平成16年12月をもって3年を経過する平成13年度採択の14課題について、国立試験研究機関等から提出される中間報告書を取りまとめ、公表する。
- ・平成16年度終了課題(22課題)について事後評価を開始する。

5. 科学技術に関する知識の普及、国民の関心・理解の増進

(1) 科学技術に関する学習の支援

スーパーサイエンスハイスクールにおける活動の支援

- ・文部科学省がスーパーサイエンスハイスクールに指定した平成14年度指定校26校、平成15年度指定校26校及び平成16年度新規指定校について、指定校、教育委員会等と密接な連携を図りつつ、円滑かつ迅速に指定校における先進的な科学技術学習等の取組を支援する。
- ・支援方法について、より円滑かつ迅速に実施できるよう実施状況を踏まえつつ見直しを行う。

先進的科学技術・理科教育用デジタル教材の開発・普及

- ・平成14年度からの実証的試験の評価も踏まえつつ、大学、研究機関等との密接な連携により児童生徒の科学技術・理科学習に有効な素材となる最先端の研究開発成果を有効に活用しつつデジタル教材の開発を進める。
- ・デジタル教材の開発に当たっては、外部専門家・有識者からなる委員会及び教材開発のための分科会において十分に審議を行った上で推進する。
- ・デジタル教材の開発に当たっては、教員や教育専門家の参画を得る。
- ・デジタル教材の開発手法及び学校においてデジタル教材を活用した学習手法について、実証的試験により事例収集し、有効な事例を公開する。
- ・デジタル教材及びその提供方法について、平成14年度に選定した1地域及び平成15年度上期に選定した6地域に加え、新たに5地域程度を選定して実証的試験を実施し、評価を実施する。評価の結果を踏まえ、デジタル教材、提供システムについて必要に応じて改良する。
- ・平成15年3月に試験的に公開を開始したデジタル教材の提供システム「理科ねっとわーく」について引き続き試験公開を行い、本格的提供までの整備に資する。
- ・デジタル教材の一般公開に向けた開発・処理を進め、順次一般公開する。
- ・「理科ねっとわーく」について、平成16年度末までに教員等の登録者数を6,500名以上とするよう、本システムの周知・普及を図る。

各教育委員会等との連携強化による成果の普及

- ・成果発表会やインターネット、成果報告書を通じ、教員や教育委員会に対し成果の普及・活用を図る。
- ・教員が参加する理科研究会等、教員等教育関係者が多く参加するイベント等に積極的に出展し、事業及び成果の普及・活用を図るとともに、関係機関への働きかけを行いつつ新聞・雑誌等メディアを活用し、事業の周知を図る。

(2) 地域における科学技術理解増進活動の推進

科学館活動支援等地域における科学技術の普及の推進

- ・ 科学館と地域の学校との連携による児童生徒の科学技術の関心の喚起、理解の増進に資する企画、科学館の職員と学校の教員との連携による科学技術学習に資する教材等資料の開発、児童生徒がものづくりの楽しさ、おもしろさを体験し、学習できるロボット・実験に関する学習メニュー開発について公募し、外部専門家・有識者等による委員会の審議により選定・支援を実施する。
- ・ 実施した企画、開発した教材等資料及び学習メニューについては、参加者等によるアンケート等による支援対象機関からの報告・自己評価を受け、委員会等による事後評価を実施する。
- ・ 支援方法についてより効果的・効率的なものとなるよう、実施状況、支援対象機関からの意見を踏まえ、見直しを行う。
- ・ 学習メニュー、教材等資料の開発成果については、成果発表会を実施し、成果の普及を図るとともに、インターネットにより情報を発信する。
- ・ 国際的な拡がりのある青少年向けの科学技術コンテストについて、外部専門家・有識者による委員会の審議を経て支援機関を選定し、青少年の国際大会への派遣等について支援する。
- ・ 他機関との連携により青少年向けのコンテストをはじめとしたイベント等を開催する。
- ・ 全国の科学館から科学館の概要やイベント情報を収集し、適時更新を行い、インターネットを通じて全国に情報を発信する。

地域における科学技術理解増進活動を担うボランティア人材の活動推進

- ・ 地域において募集等によりボランティア人材を確保し、ボランティア等に対する研修等を通じて養成し、その活動を推進していくことによりボランティアが効果的に活動できる環境を整備する。
- ・ 科学技術理解増進ボランティア同士やボランティアと学校、科学館、研究機関等とが連携した活動に対して積極的な支援を行うとともに、インターネット等を活用しつつ情報発信を推進し、地域の科学技術理解増進リソース間の有機的連携関係を構築する。

(3) 全国各地への科学技術情報の発信

T V 向け科学技術番組の開発

- ・ 番組、放送形態等について、モニター調査を実施し、評価する。
- ・ トピックに応じた形で番組制作が行うことができるよう大学、研究機関や研究者、技術者との連携関係を構築するとともに、モニター調査等視

聴者のニーズを踏まえつつ、様々な観点からの番組制作を実施する。また、放送番組の編成や適正については、外部専門家・有識者からなる委員会において審議する。

- ・番組作成に当たって、機構の他事業との連携を推進する。
- ・国内外の映像祭に出品し、番組の評価を推進する。
- ・TV向け科学技術番組のインターネットによる配信を実施するとともに、TVメディア、インターネットによる配信の周知を図り、視聴数増を図る。

波及効果の高いメディアの活用やイベントの開催

- ・科学技術理解増進についての手法の情報交換、共同した活動を、日米をはじめ国際的に検討していく。
- ・バーチャル科学館等青少年の興味・関心に応じ、インターネットを通じた情報発信を推進する。
- ・著名な研究者を招聘した講話を実施し、科学技術に関する知識を普及する機会の充実を図るとともに、参加者に対しアンケート等調査を実施し、効果の検証を行う。

先駆的な手法を用いた展示手法、展示物の開発

- ・平成15年度に開発した展示については、日本科学未来館で展示し、来館者の反応等を把握しつつ、今後の科学館等での活用を検討する。
- ・平成16年度については、日本科学未来館での展示更新及び2005年日本国際博覧会（愛・地球博）への出展に配慮しつつ、2テーマ以上を開発する。

(4) 日本科学未来館の整備・運営

展示の充実

- ・来館者のニーズに応えた魅力ある展示を行うとともに、来館者に対するアンケート調査等に基づく結果の分析、評価を行い展示の改善に向け新規展示手法や新規展示開発のための試作を行う。
- ・最先端の科学技術の動向をフォローするため、研究者・技術者等から情報を収集するとともに、展示、実験プログラム等の開発に際しては、研究者、技術者の参画を得る。
- ・民間企業等の外部機関の協力や連携による展示を行う。

運営の改善

- ・春、夏、冬休みにおいては、通常休館日である火曜日を開館日とする。
- ・季節、曜日等により開館時間を柔軟に延長する。
- ・前年度に実施した検討結果を踏まえ授乳室の設置を行う。

- ・来館者から寄せられるメールや電話、アンケート等により、施設環境についての来館者の要望等を把握するとともに、必要な改善を行う。
- ・学会等の講演会、シンポジウムなどの開催を促進するため、研究機関や学会等への広報活動を行うとともに、研究者、技術者が一般の方々と交流するイベント、セミナー等を開催する。

運営体制の充実

- ・登録ボランティアの増加及び友の会会員の増大を図るため、インターネット等でボランティア及び友の会の活動内容を知らせるとともに、エントランス等での来館者に対する勧誘を積極的に行う。
- ・新しいタイプの科学館スタッフである科学技術スペシャリストを雇用し、能力開発制度による育成を図るほか、研修会等への参加を実施する。
- ・研究者・技術者等の有識者を含む委員会等により、事業運営についての意見を聴取し、その反映について検討する。

他機関との連携

- ・国内の科学館等との連携を図るため、科学館連携ネットワークを構築するとともに、海外の科学館等との連携を図るため、日本科学未来館についての情報発信を行う。
- ・国立科学博物館、科学技術館との連絡会議を開催するほか、共通入場券の発行等を行う。
- ・科学館人材の育成のため、研修会を開催する。
- ・大学院等との連携により日本科学未来館をフィールドに使った理解増進手法に関する共同研究等を推進する。
- ・高等学校等と連携し、日本科学未来館における理解増進手法の開発を行う。

来館者数の確保

- ・以上を実施し、年間で来館者数50万人以上を確保する。
- ・来館者の増大を図るため、広報活動を行う。

6. その他行政等のために必要な業務

(1) 関係行政機関の委託等による事業の推進

我が国の科学技術政策の推進に貢献すること等を目的として、関係行政機関等の委託等により、専門的能力を必要とする各種業務を実施する。

業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置

1．組織の編成及び運営

(1) 組織の運営

- ・理事長の経営判断に資するため、機構の業務運営に関する重要事項を審議するための科学技術振興機構運営会議を発足させる。審議結果を踏まえ、運営改善方策の検討、企画機能の強化を図る。
- ・年度当初に予算の一定割合を留保し、理事長が各業務の進捗状況を把握して、計画達成のために追加の予算配賦を行うシステムを運営する。
- ・決裁権限の見直しを通じた部室長の権限の強化を検討・実施する。

(2) 組織の編成

- ・効率的・効果的な組織編成及び人材配置等を行うための情報収集を目的として、既存事業の進捗状況及び新規予算の獲得状況等、業務の実情を把握するための各部室長からのヒアリングを半期毎、又は必要に応じて実施し、その結果を主として4月、10月の人事異動に反映する。
- ・職員個々の業務の現状、今後の異動希望先等の把握のため、従前より年1回行っていたアンケートについて、個人の適性、希望がより明確に表れるようにする等アンケート内容の見直しを図るとともに、結果を人事異動等に反映する。

(3) 職員の研修及び業績評価

- ・自己啓発及び能力開発のための研修として 階層別教育研修（新入職員、新任の課長級、課長代理級、係長級）、外部研修機関を利用したテーマ別教育研修、国の機関が実施する各種職務研修、キャリアアップを図るための各種通信教育、職員の資質向上を目指した資格の取得、語学習得等を目的とした国内・海外留学など各種研修を実施する。
- ・透明性及び公平性のある人事制度の構築に向け、平成16年度中に外部の人事コンサルティング会社等を活用した検討を開始し、平成17年度に新規人事制度の設計を行う。

2．業務運営の効率化

(1) 事務の効率化、合理化及び経費の削減

国において実施されている行政コストの効率化を踏まえて、以下の事項を含む業務の効率化を進め、一般管理費（人件費を含む。なお、公租公課を除く）及び業務に係る事業費について、業務の効率化を行う。

また受託事業収入で実施される業務についても効率化に努める。

スケールメリットを活用した効率化等

- ・ 民間の経費節減に関するノウハウも参考にしつつ、平成15年度の効率化実績を踏まえて、業務効率化の具体的方策を更に検討する。
- ・ 事務用品等消耗品や各種機械等についても業務に影響の出ない範囲で共同購入を実施するとともに、より一層の競争入札の導入を推進する。
- ・ 図書一覧表の活用を通じ、図書資料等の共有化を一層進めるとともに、図書資料等の購入数を削減する。
- ・ 各事業の研究等終了後の物品情報を積極的に公開し、利活用の機会を拡大し、物品の有効利用を引き続き推進するとともに、売却の可能性についても検討する。
- ・ 基礎研究事業における事務参事会議、地域関係事業におけるコーディネータ会議等を開催し、業務運営の効率化に関する情報、ノウハウを共有化する。
- ・ 海外事務所の経理報告書の共通化を図る。
- ・ 日本科学未来館のホール、会議室等の外部利用を積極的に推進するため、学会、研究機関等への広報を積極的に行う。

管理的経費の節減

- ・ 管理部門の管理費の節減に努め一般管理費を削減する。
- ・ 日本科学未来館、研究成果活用プラザ等を含む機構の全施設において管理部門の光熱水料の節減に努め、固定経費を削減する。
- ・ 戦略的創造研究推進事業において平成16年度に新規に発足したチーム型研究の領域については、原則として事務所を開設しない。また、既設の領域事務所についてはその役割を見直し、効率化を図る。
- ・ 知的財産保有コスト節減及び特許有効活用を図るため、特許の価値評価に関して、評価基準、評価方法等の基本案を作成する。

電子化・ペーパーレス化の推進

- ・ 電子決裁システムを導入し、文書決裁の電子化を進める。
- ・ 全体的な経費節減効果を考慮し、研究事務所を順次インターネットVPNを利用した接続に切り換える。
- ・ IP電話導入について検討し、節減効果が見込まれる場合は導入する。
- ・ 公募を行う事業のうち、可能なものから、電子的に申請を受け付ける。
- ・ 機構の事業に関わる研究者情報等のデータベース化、情報共有化を進める。

文献情報提供業務における効率化

- ・ 業務運営の効率化のための具体的方策に沿って、各実施項目を推進する。

- ・文献データベースの抄録作成作業の合理化計画に沿って経費削減を行う。
- ・ユーザーニーズが高く、収支バランスの良い商品に重点化し、それ以外の商品については見直しする等の検討を行う。
- ・紙媒体で出力している各種資料のうち電子媒体に移行できるものは電子媒体に移行する。

(2) アウトソーシング及び外部機関との連携

- ・外部の専門的な能力を活用することにより高品質のサービスが低コストで入手できるものについてアウトソーシングを積極的に活用し、事務を効率化、合理化する。
- ・日本科学未来館と国立科学博物館、科学技術館との有機的な連携協力を推進するため、実務担当者の意見交換会等を行う。

予算（人件費の見積りを含む。） 収支計画及び資金計画
別紙参照

短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は224億円とする。短期借入が想定される事態としては、運営費交付金等の受け入れに遅延が生じた場合である。

重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画
重要な財産を譲渡、処分する計画はない。

剰余金の使途

科学技術振興に関する業務の充実、所有施設の改修、職員教育・福利厚生
の充実、業務の情報化、機構の行う広報の充実に充てる。

その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1．施設及び設備に関する計画
なし

2．人事に関する計画

(1) 方針

- ・アウトソーシングの推進等を通じ、業務の効率化を行うとともに、業務量の変動に応じた柔軟な組織体制を構築し、職員個々の能力に応じた人員配

置を行う。

- ・競争的研究資金による事業を有効に実施するため、研究経験を有する者をプログラムディレクター、プログラムオフィサー等に積極的に登用する。

(2) 人員に係る指標

業務の効率化を進め、常勤職員数については抑制する。

(参考1)

平成16年度当初の常勤職員数(任期の定めのない職員) 475人

平成16年度末の常勤職員数の見込み(任期の定めのない職員) 475人
以下

(参考2)

平成16年度の人件費(前記常勤職員)総額見込み 4,805百万円

但し、上記の額は、役員報酬並びに職員給与及び社会保険料等に係わる事業主負担分等経費に相当する範囲の費用である。

3. 中期目標期間を超える債務負担

中期目標期間を超える債務負担については、研究開発委託契約において当該契約の期間が中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画への影響を勘案し合理的と判断されるものについて行う。

(別紙)

III. 予算(人件費の見積もりを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

平成16年4月～平成17年3月 予算

(総計)

区別	金額(単位:百万円)
収入	
運営費交付金	94,715
政府その他出資金等	1,530
業務収入	12,066
その他の収入	159
繰越金	316
受託収入	549
計	109,335
支出	
一般管理費	4,271
(公租公課を除いた一般管理費)	3,431
うち人件費(管理系)	1,613
うち物件費(公租公課を除く)	1,818
うち公租公課	840
事業費	104,602
新技術創出研究関係経費	57,334
企業化開発関係経費	14,857
科学技術情報流通関係経費	13,943
うち一般勘定	4,891
うち文献情報提供勘定	9,052
研究開発交流支援関係経費	8,277
科学技術理解増進関係経費	6,275
人件費(業務系)	3,916
受託経費	549
計	109,422

[人件費の見積り]

期間中総額4,805百万円を支出する。

但し、上記の額は、役員報酬並びに職員給与及び社会保険料等に係わる事業主負担分等経費に相当する範囲の費用である。

(一般勘定)

区別	金額(単位:百万円)
収入	
運営費交付金	94,715
業務収入	4,018
その他の収入	69
受託収入	190
計	98,993
支出	
一般管理費	4,026
(公租公課を除いた一般管理費)	3,260
うち人件費(管理系)	1,613
うち物件費(公租公課を除く)	1,647
うち公租公課	766
事業費	94,864
新技術創出研究関係経費	57,334
企業化開発関係経費	14,857
科学技術情報流通関係経費	4,891
研究開発交流支援関係経費	8,277
科学技術理解増進関係経費	6,275
人件費(業務系)	3,229
受託経費	190
計	99,080

[人件費の見積り]

期間中総額 4,246 百万円 を支出する。

但し、上記の額は、役員報酬並びに職員給与及び社会保険料等に係わる事業主負担分等経費に相当する範囲の費用である。

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

(文献情報提供勘定)

区別	金額 (単位 : 百万円)
収入	
政府その他出資金等	1,530
業務収入	8,048
その他の収入	90
繰越金	316
受託収入	359
計	10,343
支出	
一般管理費	245
(公租公課を除いた一般管理費)	171
うち物件費 (公租公課を除く)	171
うち公租公課	74
事業費	9,739
科学技術情報流通関係経費	9,052
人件費 (業務系)	687
受託経費	359
計	10,343

[人件費の見積り]

期間中総額 559 百万円 を支出する。

但し、上記の額は、役員報酬並びに職員給与及び社会保険料等に係わる事業主負担分等経費に相当する範囲の費用である。

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

2. 収支計画

平成16年4月～平成17年3月

(総計)

区別	金額(単位:百万円)
費用の部	87,618
経常費用	87,618
一般管理費	4,337
人件費(管理系)	1,613
物件費(公租公課を除く)	1,884
公租公課	840
事業費	66,486
新技術創出研究関係経費	25,667
企業化開発関係経費	12,538
科学技術情報流通関係経費	11,848
研究開発交流支援関係経費	6,784
科学技術理解増進関係経費	5,853
人件費(業務系)	3,795
受託経費	549
減価償却費	16,247
財務費用	0
臨時損失	0
収益の部	84,382
運営費交付金収益	58,857
業務収入	12,066
その他の収入	191
受託収入	549
資産見返運営費交付金戻入	8,356
資産見返補助金等戻入	4,329
資産見返寄付金戻入	35
臨時利益	0
純損失	3,236
目的積立金取崩額	0
総損失	3,236

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

(一般勘定)

区別	金額(単位:百万円)
費用の部	75,854
経常費用	75,854
一般管理費	4,026
人件費(管理系)	1,613
物件費(公租公課を除く)	1,647
公租公課	766
事業費	58,918
新技術創出研究関係経費	25,667
企業化開発関係経費	12,538
科学技術情報流通関係経費	4,846
研究開発交流支援関係経費	6,784
科学技術理解増進関係経費	5,853
人件費(業務系)	3,229
受託経費	190
減価償却費	12,720
財務費用	0
臨時損失	0
収益の部	75,854
運営費交付金収益	58,857
業務収入	4,018
その他の収入	69
受託収入	190
資産見返運営費交付金戻入	8,356
資産見返補助金等戻入	4,329
資産見返寄付金戻入	35
純利益	0
目的積立金取崩額	0
総利益	0

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

(文献情報提供勘定)

区別	金額 (単位 : 百万円)
費用の部	11,765
経常費用	11,765
一般管理費	311
物件費 (公租公課を除く)	237
公租公課	74
事業費	7,568
科学技術情報流通関係経費	7,002
人件費 (業務系)	566
受託経費	359
減価償却費	3,527
財務費用	0
臨時損失	0
収益の部	8,529
業務収入	8,048
その他の収入	122
受託収入	359
臨時利益	0
純損失	3,236
目的積立金取崩額	0
総損失	3,236

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

3. 資金計画

平成16年4月～平成17年3月 予算

(総計)

区別	金額(単位:百万円)
資金支出	115,135
業務活動による支出	69,880
投資活動による支出	38,094
財務活動による支出	0
翌年度への繰越金	7,162
資金収入	115,135
業務活動による収入	107,522
運営費交付金による収入	94,715
業務収入	12,066
その他の収入	191
受託収入	549
投資活動による収入	0
財務活動による収入	1,500
前年度よりの繰越金	6,113

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

(一般勘定)

区別	金額(単位:百万円)
資金支出	103,398
業務活動による支出	61,649
投資活動による支出	35,946
翌年度への繰越金	5,804
資金収入	103,398
業務活動による収入	98,993
運営費交付金による収入	94,715
業務収入	4,018
その他の収入	69
受託収入	190
投資活動による収入	0
財務活動による収入	0
前年度よりの繰越金	4,406

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

(文献情報提供勘定)

区別	金額 (単位 : 百万円)
資金支出	11,737
業務活動による支出	8,231
投資活動による支出	2,148
財務活動による支出	0
翌年度への繰越金	1,358
資金収入	11,737
業務活動による収入	8,529
業務収入	8,048
その他の収入	122
受託収入	359
投資活動による収入	0
財務活動による収入	1,500
前年度よりの繰越金	1,708

[注釈] 各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。